

大田垣蓮月と松浦武四郎・川喜田石水夫妻

神 谷 勝 広

はじめに——短歌革新——

落合直文（文久元年〔一八六一〕～明治三十六年〔一九〇三〕）が、明治二十六年に浅香社を結成し、その門下から出た与謝野鉄幹（明治六年〔一八七三〕～昭和十年〔一九三五〕）は、妻晶子（明治二年～昭和十七年）とともに雑誌『明星』で浪漫的歌風を展開していく。また、正岡子規（慶応三年〔一八六七〕～明治三十五年〔一九〇二〕）は、旧派の古今調を批判し『万葉集』を重視しながら、「写生」を主張する。確かに大きな変化であり、「革新」と呼ぶに値しよう。

しかし、なぜ「革新」ができたのか。和歌が単純に「衰退」していたからとすることはできないだろう。もし和歌が本当に衰退し、和歌に対する関心を多くの人々が失って

いたなら、「革新」は起こりえなかったのではないか。言い換えれば、「革新」の成立には、和歌への関心が根強く存在していたというところが、必要条件になるのではないか。

「革新」の意義を考察するためにも、当時、一般の人々——歌壇などで活躍していない人々——が和歌へどのような想いを抱いていたかを調査することは意味があらう。

一 坂本龍馬

かつて、宮地佐一郎『龍馬の手紙』（講談社学術文庫 二〇〇三年）・管宗次『坂本龍馬と新撰組（文）で読む幕末』（講談社メチエ 二〇〇四年）を読んだ際に、興味を覚えた書簡が二通あった。

慶応三年（一八六七）三月六日付の印藤肇宛龍馬書簡には、龍馬の和歌愛好がはっきり表れている。（なお以下、引用に際しては、

読みやすさを考慮して、適宜、旧漢字を新漢字に直し、句読点・濁点などを付した。

……時々相集り歌よみついに一卷とはなして、ある翁をたのみ其一二をつけしに飯立市となりたり。幸にやつがれがうたは第二とはなりぬ、其歌は、

心からのどけくもあるか野べはなを雪げながらの春風ぞふくその頃より引つゞき家主などしきりに歌をよみ、ある人は書林にはしりなどしかぐに候。御ひまあれば御出かけ、おもしろき御事に候。……やつがれも時々三十一字を笑出し、ともに楽しみ申候……

下関での歌会の様子を知人の印藤へ伝え、歌会への参加を誘った内容である。龍馬を含め和歌好きの者たちが時々集まって歌会をしていたが、ある人に批評をもらったところ、龍馬の歌は運よく二位という好評価が与えられた。龍馬にとって、実に楽しい集まりであった。

慶応元年九月九日付、姉（乙女）・おやべ宛龍馬書簡は、お龍を妻にしたことを伝えたもので、龍馬の書簡の中で最も有名なものである。この書簡には、次のような記述も見える。

……わたしがお国におりし頃には、吉村三太と申もの頭のはげたわかいしゆこれあり候。これがもち候歌本、新葉集とて南朝、

大田垣蓮月と松浦武四郎・川喜田石水夫妻

楠木正成公などのころよしにて出来しうたのほん也、これがほしくて京都にて色々求候得ども、一向手にいらす候間、かの吉村より御かりもとめなされ、おまへのだんなさんにおんうつさせ、おんねがい被成、何卒急に御こし可被下候。……

ここにも明らかな和歌への拘りがある。『新葉和歌集』がどうしても読みたかったらしい。京都では見つからないので、土佐の知人が所有する本を義兄に写してもらい送ってほしいと頼んでいる。

この書簡には、さらに、

……短尺箱に母上父上の御歌、おばあさんの御歌、権兄さんのおうた、おまへさんの御うたこれありけり。なにとぞ父上母上おばあさんなど死うせたまいし時と日と、皆短尺のうらへおんしるしなされおんこし……

と続いている。龍馬は、実家に残しておいた短尺箱から、身内の和歌短冊を送ってほしいと依頼している。管宗次前出書が指摘するように、新妻のお龍に自分の身内を親しく感じさせたかったのであろう。今なら、家族写真でも送ってもらおうところかもしれない。和歌短冊を介して、家族への絆が存在している。

龍馬の場合、

- 仲間たちと和歌を通じて楽しく交際している。
- 見たい歌集を熱心に探している。

・和歌短冊を介して、身内を偲んでいる。

幕末の志士龍馬に対して、我々は勇ましい無骨な人物であったと思
い込んでいないだろうか。その思い込みのために、龍馬における和
歌の関わりは想像しにくい。しかし、実際には、和歌——創作・鑑
賞のみならず、和歌をめぐるさまざまな事柄を含めて——へ強い関
心を抱いていたのである。

先にあげた宮地・管両氏の書籍を讀んで以来、幕末明治初におい
て、和歌への関心が根強く存在していたことを示す事例を探し求め
ている。

今回は、大田垣蓮月と松浦武四郎・川喜田石水夫妻の関わりに注
目してみたい。

二 大田垣蓮月に対する齋藤茂吉の批判

大田垣蓮月は、寛政三年（一七九二）に京都で生まれ、明治八年
（一八七五）に他界し墓は西賀茂にある。幕末明治初に活躍した女
流歌人である。

身内との縁が薄く、生後十日で智恩院門跡の坊官大田垣伴左衛門
光古の元へ養子に出され、若くして夫・五人の子供すべてを失い、
頼りとしていた養父光古も、蓮月が四十二歳の時に没している。幼
い時から和歌を好み、上田秋成に添削を受けたり、香川景樹と関わ

ったりしていたようだが、はつきりしない。嘉永二年（一八四九）
五十九歳で六人香是香（むとべよしか）に入門するものの、具体的
なこととなると、これも未詳といわざるをえない。蓮月は、和歌を
詠むだけでなく、自分の和歌を書きつけた陶器も造り、その陶器を
売ること、生活の糧をえていた。いわゆる「蓮月焼」である。

蓮月に対して、齋藤茂吉は批評を加えている。「明治大正短歌史
概観」（改造社 昭和四年）において、第一期として明治初年から
明治十年前後を仮に区切ってこれに当て、宮中御歌所歌人の流派に
属する人びとを略述し、三条実美、岩倉具視、八田知紀、井上文雄、
大田垣蓮月について個別に短評を加えているが、蓮月の歌一首に触
れて、彼は次のように述べる。

宿かさぬ人のつらさを情にておほる月夜の花の下臥

といふ歌は有名だが、この歌を私は感心しない。ただかういふ、
尤もらしい、人心の機微をあらはしたものだなどと思はせるや
うな歌が、当時有名になつたといふことは、当時の歌壇乃至一
般の鑑賞者の気持が分かるのであつて、当時の歌壇風潮を知る
一つの目安となるのである。

ここで、「当時の」「一般の鑑賞者の気持が分かる」といつている。
「一般の鑑賞者の気持」とは、おそらく右書序論にある「分かりよ
い古今集調に、気の利いた言ひまはしをなす」歌を好む傾向をいう

のであろう。

しかし、「当時の」「一般の鑑賞者」の抱いていた和歌に対する気持ち、右のように判断しておくだけでよいのだろうか。

三 松浦武四郎

さて、松浦武四郎（一八一六～一八八九）の事例を示す。武四郎は、伊勢出身ながら、蝦夷地を六度にわたり調査し、北海道の名付親として名高い探検家である。

実は、武四郎は、蓮月の短冊・焼物を好み、伊勢の豪商川喜田石水（一八二二～一八七九）に蓮月の短冊・焼物を懇願している。その様子は、石水博物館蔵石水宛武四郎書簡（『三雲町史第三巻資料編2』〔三雲町史編纂委員会 二〇〇〇年〕に翻刻所収）からうかがえる。

蓮月に関わる文面を書簡から抜き出し、改めて年代順に並べ直してみると、以下ようになる。

・安政二年（一八五五）十月十三日

……呉々も蓮月尼たんざく奉願候……蓮月尼たんざく贈被下候
由、書中に御認有之候得共たんざくは参り不申候、何卒一枚頂
戴仕度候、呉々も此義奉願候……

・安政二年十月十六日

大田垣蓮月と松浦武四郎・川喜田石水夫妻

……蓮月のたんざく何卒奉願候……

・安政二年十月二十三日

……蓮月たんざく奉願候……

・安政二年十二月三日

……蓮月たんざく是も奉願候……

・安政二年十二月二十三日

……蓮月たんざく此度は慥に相届き申候……

・安政五年一月三日

……京師蓮月の焼候さびしよ、もし御持合せ有之候はゞ、一つ頂戴を願度奉存候、是も私共京師え両三度頼遣し候得共、未だ参り不申、甚以渴望仕候間、若御手元に無御座候はゞ、御地より京えは近く候間、一つ御注文被成下候、御もとめ送り被成候様奉願候……右の御礼には何哉茶席御用ひ被成候様の物を蝦夷細工にて彫らせ進上仕候間、何卒蓮月の手焼一つ奉希候……

・安政五年一月十八日

……蓮月の急須、何卒一つ御もとめの程奉希申候、右の御礼には蝦夷敷もの并に蝦夷細工等差上候……

・文久三年（一八六三）二月十三日

……今般は、蓮月茶碗五つ・竹仙菓子器、御恵投被成下候、有難仕合に奉存候……右礼として

東蝦夷日誌 二冊

西蝦夷日誌 一冊

大小扇 二握

これらの文面を見れば、武四郎が蓮月の和歌へ執着を持っていることは明らかである。

しかし、書簡の時期に武四郎の伝記的事実を対応させると、さらには驚きを覚える。

安政二年 九月 幕府へ蝦夷関係の著作を納める。

十二月 幕府の雇いとなり、蝦夷地御用を命じられる。

安政三年 二月 函館に向け出立。

三月 函館を出立。蝦夷各地を巡る。

十月 函館に戻る。

十一月 病気のため死を覚悟する。

安政四年 四月 蝦夷地山川地理取調御用を命じられ、調査に赴く。

八月 函館に戻る。

安政五年 一月 山川地理調査のため函館を出立。

八月 函館に戻る。

十一月 江戸に戻る。

文久三年 二月 常陸国沼割のことを依頼され、調査に赴く。

蓮月の短冊を繰り返し懇願していた安政二年十月から十二月にかけて、武四郎は、幕府から蝦夷御用を命じられるかどうかの時期であり、蓮月の短冊を持って函館に向いたかったのである。

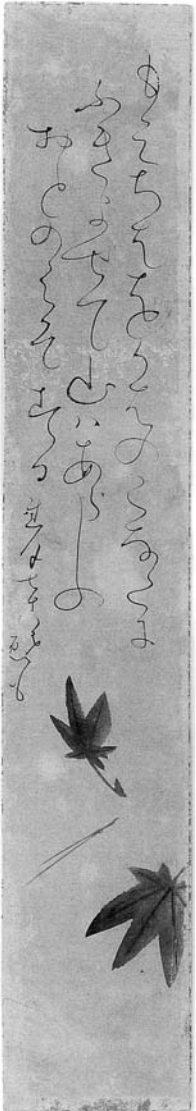
蓮月焼の「きびしよ」（急須のこと）を懇願した安政五年一月は、蝦夷調査のために函館を出立する直前であった。つまり、死の危険と背中合わせの調査に向かう直前に、右にあげた書簡は書かれていたのである。時期からして、書簡が津の石水の元に届いた頃には、武四郎は函館を旅立っている。もし運よく無事に戻れたなら、蓮月の和歌が刻まれた急須で茶を飲みたいという気持ちがあったのであろう。

過酷極まりない生死に関わる極限状況下で、しかも「蝦夷敷もの」「蝦夷細工」という当時珍しく貴重であったと思われるものを手放してでも、蓮月の短冊・急須を欲している。にわかには信じがたいほどの情熱である。

文久三年二月も多忙であったはずだが、『東蝦夷日記』『西蝦夷日記』などをお礼として、石水へ贈っている。

その後、明治二年（一八六九）六月、武四郎は明治政府から蝦夷開拓御用係を命じられ、京都で仕事をしますが、この時、武四郎は、富岡鉄斎（一八三六―一九二四）と親しく付き合う。武四郎が、明治二年七月に家族に宛てた書簡には、鉄斎について、次のように述

月夜の
 静けさに
 思ひを
 寄せて
 送る



べている。

当時書画・詩歌出来候事は、近代に並なき人物に御座候……蓮月尼の義子にて、余程僕は京都第一の懇意也……

富岡鉄斎は、蓮月に十二歳の頃から薫陶を受けており、その関係は親子以上のものがあつたといわれる。「蓮月の義子」と武四郎が述べる所以である。

この時期、武四郎は、蓮月とも直接の関わりを持つようになっていた。北海道開拓記念館編『松浦武四郎 時代と人びと』（北海道出版企画センター 二〇〇四年）に掲載された武四郎画蓮月賛「蝦夷人舞踏之図」（現在、松浦一雄氏蔵）は明治三年制作と推定でき、また同氏蔵「やまと錦」に収録されている武四郎宛蓮月書簡三通も明治二年と考えられる。そして、これらの書簡の文面からも、武四郎が蓮月の健康を思いやり、梅干や海苔などを贈っていることがわかる。蓮月他界の際には、鉄斎が武四郎に丁寧な書簡を出しており、このことも生前の深い繋がりをうかがわせる。

武四郎は、

・生死に関わる極限状況下で、蓮月の和歌短冊・焼物を身近におくことを強く望んでいる。

・その後、蓮月と直接付き合うようになり、非常に細やかな心遣いを行っている。

といえる。

蓮月短冊（上下に金の付けられた蓮月の好み短冊・押絵の人形が貼られた短冊・自画を伴う短冊、架蔵）を参考にあげる。蓮月短冊は、流れるような独特な筆跡で、全体としては奇麗なものが多し。武四郎が望んだ短冊も、おそらくそのようなものであつたと思われる。

四 川喜田石水夫妻

武四郎から蓮月の短冊などを懇願された川喜田石水（木綿問屋を営んだ代表的伊勢商人）は、蓮月と直接交流があつた。これまでの蓮月研究では、その関係は指摘されていないが、石水博物館（三重県津市）で調査をさせていただいたところ、石水宛蓮月書簡を二通見つけられた。

① 年月日不明

先もじは、いろくけつかう成御しなぐいたゞき、山くありがたく存上まいらせ候。扱も仰付られ候事、ま事にくうたはもとよりいろもてもわろく候て、けつかうなる御糸をばけがし、恐入まいらせ候。御ゆるし被遊被下候、い後かやうの御用ふさい不申候様、御ゆるし被遊被下候、何も又く御礼申上まいらせ候、めでたくし。

川北様

蓮月

川北久太夫様 大田垣蓮月

上

現代語訳を施せば次のようになる。

この前は、いろいろ結構なお品を頂戴し、誠にありがたく存じております。さて仰せいただきましたことですが、本当に和歌はもちろん色も筆跡も悪くて、素晴らしい絵を汚してしまい、恐れ入ります。お許し下さい。以後このような御用はおうけないようにいたしたく、お許し下さい。いろいろまたお礼は申し上げます。めでたくかしく。

川北様

蓮月

川喜田は川喜多あるいは川北と表記することもある。また蓮月の筆跡も他の書簡類と比較検証したが、蓮月のもので間違いない。蓮月の生没年を勘案すれば、宛先の川喜田は、十四代当主の石水と判明する。右の書簡の中で、「御丞」とある。おそらく石水から、自分の描いた絵へ賛を付けてくれるように、蓮月へ依頼があったのである。なお、蓮月は、以後の依頼を断っているが、蓮月の手紙には多く出てくるもので、誰に対しても毎度のことであつたらしい。

② 年よび日不明

(封書前面)

(文面)

六月

一ふで申上存候。あつさのせつに御ざ候所いよ／＼御機嫌よくいらせられ候はんと、御めで度存上まいらせ候。ま事に先達ては、けつかうなる御手本、またしろがねさつに御めぐみいたゞき山／＼ありがたく、およばながら日々拝見いたしましたのしみありがたく御礼筆紙につくしがたく存上まいらせ候。早々書状にてもいたし候はづ、少々不快にていまだしか／＼といたし不申。それゆへ大に御ぶさた申上まいらせ候。ま事にこの御礼御はづかしく候へども、ありあわせせめての御礼にと、ゑも小兵へどのへことづけまいらせ候。何も／＼大にとしより候て、らち明不申、失礼のみ御ゆるしあそばし被下候。めでたくかしく。

蓮月

政大人 みまへに

これも現代語に訳しておく。

一筆申しあげます。暑さの頃になりましたが、いよいよ御機嫌よくお過ごしのことと、めでたく思っております。本当にこの前は、素晴らしいお手本と、銀札(紙幣のこと)をお恵みいた

最後に

だきともありがたく、（お手本は素晴らしく）及ばすながら日々拝見し愉しんでおりますが、ありがたさは筆紙にはつくしがたく思っております。すぐに書状をお送りすべきでしたが、少し体調が悪く未だにしっかりとしません。それゆへずいぶんご無沙汰をしてしまいました。誠にこのような御礼はお恥ずかしいのですが、あり合わせのせめてもの御礼にと、絵も小兵衛殿へ言付けました。すべて年を取ったため、埒があきません、失礼ばかりでお許し下さい。めでたくかしく。

政大人 みまへに
蓮月

蓮月

幕末明治初、確かに歌風は「停滞」していたのかもしれない。しかし、和歌——創作・鑑賞だけでなく、短冊への愛着、歌人との親しい交際などを含む——への関心は根強く存在しており、それが「革新」へ繋がったのではないか。

幕末明治初の資料はまだまだ発見が期待である。具体的な事例を積み重ねていくことで、これまで以上に右のことがらを明瞭にできると考えている。

〔付記〕 資料の閲覧および読解に際し、石水博物館の方々には御高配をた

まわりました。記して深謝いたします。

なお、本稿は、科学研究費補助金課題「江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究」（研究課題番号21320052）の成果の一部である。

封書の宛先は川喜田家当主石水の通称「川北久太夫様」となっているが、中身は、「政」（石水の妻）へのもので、蓮月との交際は、家族ぐるみであった。政は、「御手本」（おそらくは歌書であろう）や、「しろがね」（銀札）を送っていたことが判明する。

以上、これらの文面から、

・石水は蓮月にいろいろ贈り物をしながら、自分の絵に蓮月の賛を望んでいる。

・当主石水だけでなく、妻政も蓮月と親しく交際している。とわかる。